

授業改善推進チームとの連携による日常授業の改善

北見市立中央小学校	学級数 16	(校長 小野祥秀	推進教員 乙武力哉)
北見市立東小学校	学級数 17	(校長 佐藤和俊	推進教員 大郷有史)
北見市立高栄小学校	学級数 17	(校長 保川直紀	推進教員 中山美穂)

I 実践テーマの趣旨

北見市の授業改善推進チーム（以下、推進チーム）は、中央小・東小の2校が最終年度の3年目を迎え、高栄小が今年度から開始された事業である。「学級担任の先生自身が授業を改善し続けられるようになること」を推進チームの目標として設定し、各校の研修テーマや課題に沿って日常授業の改善に取り組んだ。

II 実践の内容

3校ともに、経験年数の短い教員が多く、授業づくりに課題が見られた。特に、単元を見通した授業計画の立案に困難が見られたことから、単元づくりを推進チームの重点として取組を行った。また、今年度はGIGAスクール構想による1人1台端末が導入されたことに伴い、授業での活用法を提案する取組も展開した。

1 配置校管理職との打合せ及び定例報告会へのミドルリーダーの参加

各校の研修テーマや課題について、管理職と共有することを目的に、定期的に管理職と現状を交流するとともに、学校評価や情報交流シートの成果と課題について協議する時間を設けた。また、定例報告会には、配置校の教務主任及び研修担当も同席し、情報共有シートをもとに、推進チームがいない2週間について、どのような手立てを行うか検討した。



【T1として授業を実施】

2 身に付けさせたい力を明確にした授業づくり

身に付けさせたい力や本時のねらいを明確にして授業の打合せを実施した。特に、若手教員に対しては、T2（またはT1）としての授業に関わり、ねらいを達成できるための発問や板書の方法について、共有した。

3 校内研修との連携

各校において、国語科の単元づくりに困っている教員が多かったことから、国語科の「物語文」や「説明文」の単元づくりについてのワークショップ型研修を実施した。また、1人1台端末を活用した思考の整理を目的とした授業公開や、1人1台端末の活用事例をもとにした研修及び実践交流を実施した。



【1人1台端末の校内研修の様子】

4 授業改善通信の発行

授業のポイントや単元づくりの方法を紹介したり、各校における好事例を共有したりすることを目的に、授業改善通信を発行した。

III 実践の成果と今後に向けて（○：成果 ●：課題）

○ 3校を巡回し、管理職や各校のミドルリーダーと協議する場を設定することにより、各校のよさや課題を明確にするとともに、各校の指導アイデアを共有し、授業づくりの視点を広げることができた。

○ 身に付けさせたい力を明確にした単元づくりに焦点化して取り組んだことにより、1単位時間の授業デザインや指示・発問の質を向上させることができた。特に、推進教員の指導・助言を受けた若手教員が、単元を見通した授業づくりを意識するようになるなど変容が見られた。

○ 「わかる・できる」を実感する児童が増え、標準学力検査の偏差値にも改善が見られた。（表：配置校Aの3年間の推移）

※第6学年は、全国学力・学習状況調査があるため標準学力検査は未実施。

● 各学校が、事業終了後も取組を継続できるよう、これまでの推進チームの取組を研修計画に位置付けたり、各学校の経営方針及び教育課程等に反映したりするなど、学校組織の強化を一層図る必要がある。

国語	2019	2020	2021
5年生	53.0	52.1	55.8
4年生	48.5	52.3	50.5
3年生	52.1	48.0	50.0

算数	2019	2020	2021
5年生	51.6	51.2	53.8
4年生	48.4	51.2	49.6
3年生	51.0	47.6	48.9

【標準学力検査の偏差値の推移】